

文化財学習会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 猪熊美術館と塩屋地区を訪ねる

講 師 宮武 讓（元丸亀市立城^{じょうこん}坤小学校校長）

平成21年6月28日（日）

共 催 高 松 市 歴 史 民 俗 協 会
高 松 市 教 育 委 員 会

1 丸亀市

平成の大合併により、平成十七年（2005年）三月二十二日に一市二町（旧丸亀市、旧綾歌町、旧飯山町）が合併し、丸亀市として新たに発足しました。香川県の海岸線側の中央部に位置し、北は瀬戸内海に面し、塩飽諸島の一部を含んでいます。平野部には数多くのため池があり、中心部に一級河川の土器川が流れています。東には讃岐富士（飯野山）が、南には羽床富士（堤山）がそびえています。市の中心には、天守と美しい石垣で知られる丸亀城が市の象徴となっています。また、うちの製造が盛んで、生産量は全国の九割を占めています。

総面積 百十一・八平方キロ

人口 十一万六千六百六十三人（平成二十一年六月一日現在）

2 猪熊弦一郎現代美術館

丸亀市出身洋画家、猪熊弦一郎の画業顕彰と地域の美術振興を目的に平成三年（1991年）開館し、現代美術の企画展などを行っています。建築設計は正統



猪熊弦一郎現代美術館

派モダニズム建築家の谷口吉生。延床面積八千平方メートルの大型施設であり、JR丸亀駅前広場に面して立地しています。

3 猪熊弦一郎

明治三十五年（1902年）高松市に生まれました。旧制丸亀中学校を卒業し、東京美術学校（現東京芸術大学）洋画科に入学、大学時代は藤島武二に師事しました。

大正十五年（1926年）結婚。新妻をモデルとして描いた『婦人像』が帝展初入選、その後、第十回帝展で『座像』が特選になり、また、第十四回帝展で『画室』が特選、以降は、帝展無鑑査となりました。昭和十一年（1936年）小磯良平、脇田和、伊勢正義たち九人のメンバーで新制作派協会（注）を設立。その後、昭和十三年（1938年）妻文子を伴いパリに渡り、アンリ・マティスに指導を受けました。第二次世界大戦勃発後、帰国。終戦後は田園調布純粋美術研究室を発足し、後進の指導に当たりました。昭和二十六年（1951年）上野駅の壁画『自由』を完成させ（六歳、横二十六歳。東日本の風情を物語風に描いて、北の玄関口の象徴となった。）、慶応義塾大学大学ホールの壁画『デモクラシー』（向かい合った二つの壁面に、それぞれ縦五歳、横七歳の大きな壁画で、二枚の壁画は、様々な姿の青年男女が、実に伸びやかに、モダンに描かれている。）と名古屋丸亀

ホテルホールの壁画『愛の誕生』で第二回毎日美術賞を受賞しました。また、白地に赤の三越百貨店の包装紙は猪熊弦一郎がデザインしたものです。日本で最初のオリジナルの包装紙は『華ひらく』と言う名前がつけられ、その包装紙の『Mitsukoshi』という文字は、当時三越の宣伝部にデザイナーとして勤めていた「やなせたかし」氏が書いたものです。小説新潮の表紙絵は昭和二十三年（1948年）から四十年間続きました。

昭和三十年（1955年）活動の拠点をニューヨークに移し、この頃から画風は抽象画へと移っていきます。イサム・ノグチ（彫刻家・画家）、ジョン・ケージ（ロサンゼルス生まれの作曲家）、ジャスパール・ジョーンズ（アメリカの画家・ポップアートの先駆者）など時代の先端を走る芸術家たちと親交を深め『獅子舞』『道』など多くの作品を残しています。脳血栓を起こしてからは、温暖なハワイで毎年冬を過ごしながら創作活動をつづけ、平成五年（1993年）五月十七日、東京の聖路加病院で急逝しました。享年九十歳でした。

（注）新制作派協会 現在は新制作協会

猪熊弦一郎 伊勢正義 脇田和 中西利雄 内田巖 小磯良平 佐藤敬 三田康 鈴木誠
社会状況が戦時体制へと移行しつつある時、自由と純粋さを求めて立ちあがった、九人の若き青年画家たちにより結成されました。

4 真照山本願寺塩屋別院

浄土真宗本願寺派（本尊 阿弥陀如来）



元和元年（1615年）播州赤穂の教法寺と門徒三十戸が、塩田開墾のため集団移住したのが始まりとされています。寛永二十年（1643年）本山から御真影などを受け、教法寺の寺号を賜り念仏中心の道場となりました。享保十九年（1734年）住如上人の時、塩屋別院となり、延享二年（1745年）境域を拡張し本堂の建設にかかりました。上棟までに三十年、書院、庫裏、鐘楼などすべての真建物^{じやうじよ}が完成するまで、五十年の歳月を要しました。

明治二十一年（1888年）には幅九間長さ百五十間の参道が完成しました。明治三十七（1904）年（1904）の日露戦争の際はロシア捕虜三百二十人を、大正三年（1



真照山本願寺塩屋別院 絵 図

914年)の第一次世界大戦後にはドイツの捕虜三百十二人を収容しました。

5 日露戦争とロシア兵俘虜

明治三十七年(1904年)四月、日露戦争が始まると丸亀の歩兵第十二連隊は、五月二十三日連隊長新山良知歩兵大佐に率いられて、多度津港から出征しました。その後も六月五日、八月二十七日と多度津港から続いて出征し、その度に六郷村民や小学生は、多度津街道に出て、多度津港まで出征兵士を見送りしました。

多度津の桃陵公園に港を見下ろすように立っている「一太郎やーい」の銅像にまつわる軍国美談は、八月二十七日のことです。

明治三十七年七月二十二、二十三の両日、

二回にわたって三百四十九名のロシア兵俘虜が多度津港に上陸し、塩屋別院に収容されました。このとき六郷村民はロシア兵の俘虜たちを、ののしったり、あざわらったりしないで迎えました。これらのロシアの俘虜たちにも、故国には一太郎の母カメのように、ひたすら子供の無事を願い、帰国を待ちわびる母親のいることを知っていたからです。

俘虜たちは、本堂の大部分を居室にし、本堂の前庭を運動場にしていました。わが国が支給したネズミ色の服装に、水兵のような帽子をかぶり、小ぎれいな服装をしていました。

乃木大将の率いる第三軍に属した歩兵第十二連隊は、旅順の攻撃に加わり、たくさんの戦死者を出しました。九月二十七日には、傷病兵が多度津港に着き、小学校の児童は多度津の港まで出迎えました。

大ロシアが相手の戦争だったため、その後も兵士の出征が続き、十月二十二日には後備兵が、二十三日には補充大隊約六百名が出征したのをはじめ、翌三十八年（1905年）



真照山塩屋別院本堂

にはいつでも一月十八日、二月九日、二十八日、三月十日と出征兵士の見送りが続きました。

明治三十八年一月一日、日本軍は旅順を占領しましたが、歩兵第十二連隊はその後も進撃を続け、おうりょくこう鴨緑江軍に加わり奉天の大会戦に参戦し、三月十日入城しました。

四月二十一日には戦死者の霊を慰めるため、本校主催のもとに尾崎才太村長、村会議員、村内の有志、松崎次郎郡長、丸亀憲兵分隊長、丸亀警察署長、新聞記者、遺族七十余名が出席し、村内各寺院の僧侶も加わって莊嚴に戦士者の慰霊祭を行いました。

明治三十八年五月五日早朝、下士官百十名、兵八百九十名合わせて一千名のロシア兵の俘虜が松山から土佐丸で回送され、白方海岸寺浜の善通寺俘虜収容所に収容されました。主に旅順開城のときの俘虜が多かったようです。

日露戦争が始まったとき、政府は日本にいたロシア人に対して「ロシア国民には、いささかの敵意も無いので、在住、出入国は自由である」と通告しました。また、文部省は日本国民に対して「ロシア国民をののしったり、あざ笑ったりしないように」と訓令しています。香川県もロシア兵俘虜に対しては「博愛心ヲ以テ俘虜ヲ取扱ウベキ」という訓令を出しています。

日本が大勝利を収めた日本海海戦（日露戦争）は、明治三十八年五月二十七日のことで、

九月五日には戦争が終わりました。六郷小学校の十月三十一日の運動会には、ロシア兵の俘虜たちも参加し大変盛況となりました。

十一月に入ると、十五日、二十一日と続々と出征兵士の凱旋が続き、小学生たちはその度に多度津街道や多度津港まで凱旋兵を出迎え、十一月十七日には日露平和克復祝賀会を挙行しました。明治三十九年（1906年）になると一月十二日に第十一師団司令部が凱旋したのをはじめとして一月十六日、十七日、十九日、二月十三日、十四日、十六日と出征兵士の凱旋が続き、丸亀市では、三か所（衛門前と繁華街に二か所）に凱旋門を立てて、凱旋を祝いました。

明治三十九年一月二十七日、別院に收容されていた俘虜は、多度津白方浜に收容されていた約千名の俘虜とともに帰国するため、多度津港から乗船し高浜に向かいまいした。俘虜のひとりキリール・フーズニコフ氏は、帰国を待たず前年の十一月三日、病死したので青ノ山の陸軍墓地に日本の戦死者とともに葬られました。



キリール・フーズニコフ氏の墓

6 ドイツ兵俘虜と丸亀

【1】 青島攻防戦

第一次世界大戦でイギリスと軍事同盟を結んでいた日本は、イギリスに加担して、大正三年（1914年）八月、ドイツに宣戦布告をしました。当時、中国の山東半島はドイツの租借地（中国からの）だったので、同年八月二十八日、久留米の第十八師団を主力とし、二万八千の兵力で、長崎港を出港、九月一日に中国の龍口及び労山に上陸しました。そして、翌二日には天津駐留のバーナジストン少将の率いるイギリス軍約一千名を加えて、青島包囲網を敷きました。

一方、ドイツ軍はワイエル・ワルティツク総督以下およそ五千の兵力であり、しかもその三分の一近くは東アジア各地から急ぎ召集した義勇兵でした。ドイツ軍は頑強な抵抗を続けたものの、十月三十一日に始まった日本軍の猛攻撃の前に屈し、一週間後の十一月七日ついに降伏しました。七十七日に及ぶ攻防戦でした。

【2】 捕虜の収容

捕虜になったドイツ兵四千六百二十七人（将校二百一人、下士官・兵四千四百四人、文官二十二二人）は日本各地の十二か所にある俘虜収容所に送られ、このうち九百五十三名が四国の松山、丸亀、徳島の各収容所に送られました。丸亀には多度津に到着した三百二十

四名の俘虜が、大正三年（1914年）十一月十六日に塩屋別院と旧赤十字看護婦養成所に収容され、このとき市内のあちこちには「歓迎」という張り紙が張られたそうです。

【3】丸亀俘虜収容所の状態

防衛研究所図書館にある丸亀俘虜収容所の日記によると、当時の日本軍は俘虜に対し、できるだけ個人個人の名誉を尊重した収容所運営をしています。

収容当初、俘虜からの願い出が四件あったと記されています。

1、食事の量ヲ増スコト

2、麦酒（ビール）ヲ飲マシムルコト

3、酒保しゅほヲ開クコト

4、将校ニハ自由散歩ヲ許スコト

1、2番については、食文化の違いから、俘虜からの不満はかなりあったようです。しかし制限はあったにせよ、ビールなどの飲酒を許可したり、後には自炊させて、自分たちの好みに少しでも合わせられるような配慮があったようです。3番の酒保とは売店のようなもので、願い出があった翌日から開かれています。俘虜たちは拘束されているとはいえ、金銭なども持ち合わせていて、タバコなどの嗜好品をかうことができました。

大正六年（1917年）の給費規定によると、俘虜の待遇は「将校及批准仕官ハ、ソノ階級ニヨリ毎月四十円乃至百円ヲ現金支給シテ自炊セシム。下士官ハ一律ニ毎月十二円、兵卒ハ同九円ニ相当スル現品ヲ支給シテ、共同生活ヲナサム」

とあり、その外に召集兵の勤務先からの送金もありました。

〔日常生活〕

（1）音楽

丸亀収容所では、マンドリン演奏をはじめとして、数多くの演奏会が催され、拘束中の俘虜たちの心を慰めたようです。その中心になったのがパウル・エンゲル水兵で、団員四十五名のエンゲル・オーケストラを結成しており、板東に移って後も名称を変えず指揮にあたっています。また、エンゲル音楽教室を開いて地元徳島の青年たちに洋楽を指導しています。

板東収容所ではいくつものオーケストラや吹奏楽団、合唱団が結成され、まるで競い合うかのように華麗なる名曲のコンサートが繰り広げられていました。

また、板東収容所のMAKオーケストラ（たびたび楽団名を変更している）は日本で始めてベートーベンの「第九交響曲」を演奏したことで有名です。総員五十五名で、当然のことながら合唱は男声のみでした。



塩屋別院に収容されたドイツ兵俘虜（鳴門市ドイツ館蔵）

(2) 門前での運動

願い出の四番目「将校ニハ自由散歩ヲ許スコト」は、警備上の問題から許されませんでした。しかし、雨などの日以外は、朝夕一時間ずつ門前で運動することができ、また週に二回、中津公園（中津万象園の西側）での散策が許されました。ここではサッカーなどで汗を流している模様が写真に残っています。

(3) その他の日常生活

彼等は職業軍人ばかりでなく、中国などで生活していたとき、現地で徴兵された一般人が約半分を占めていたため、さまざまな職能を持っていたと記録されています。そこで、当時の政府も俘虜から先進技術を学び、日本人の技能習得に役立てようと、雇用の場を求めました。そこで、二人の俘虜が、家具造りや図面作成などを教えるため、約六十日間、現在の高松工芸高校にまで通いました。このほか、音楽教師として近くの学校へ行ったり、俘虜作成の作品展示会を開催したりと、丸亀市民への影響も少なくなかったようです。

また、食事に使われている野菜が臭いというので、近くに借りた菜園で俘虜自らが野菜作りをし、赤カブを収穫したという新聞記録もあります。

【3】 板東収容所へ移転

大正六年四月、四国の俘虜全員が板東の収容所に移されました。板東収容所は急いで陸

軍用地に建設されたもので、徳島より二百六名、丸亀より三百三十三名、松山より四百十四名が移送され、さらに一年四ヶ月後、久留米より九十名が追加移送されています。

【4】 開放後の俘虜

丸亀で二年半を過ごし、板東へ移った俘虜たちは、大正八年（1919年）の暮れから翌年のはじめにかけて、収容所から解放されました。板東の俘虜のうち約四分の一は日本、中国、オランダ領の東南アジアに止まりましたが、その他の俘虜たちはドイツに帰りました。日本に残った者の中には、トランジスターの原材料になるレアメタルを輸入したバルトやドイツ語教育に尽くしたボナーなど活躍が知られている者も多くいます。

7 慧日山正宗寺

えにちざんしょうじゅうじ

浄土真宗本願寺派（本尊 阿弥陀如来）

建永二年（1207年）流罪の法然上人が本島から着船の折、船の櫓で岸を掘って真水を湧出させたと伝えられる櫓堀の井戸があります。
かいぼり

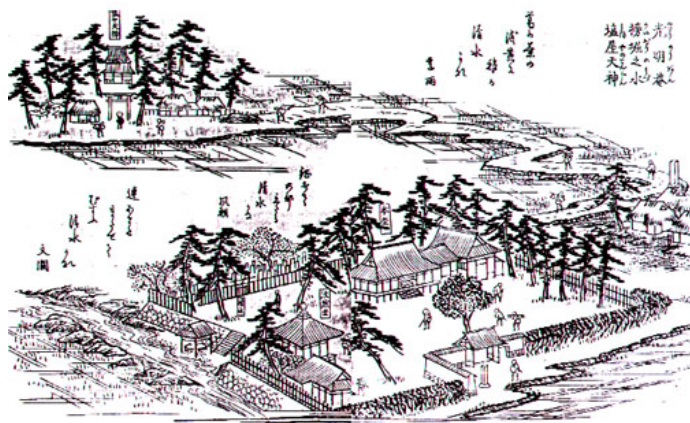
法然は、元禄十一年（1698年）に東山天皇から『円光大師』の号を送られ、その後、
えんこう

宝永八年（1711年）に中御門天皇から『東漸大師』、宝暦元年（1751年）に桃園天
なかみかど
とうぜん

皇から『慧成大師』、文化八年（1811年）に光格天皇から『弘覚大師』、万延二年（1861年）に孝明天皇から『慈教大師』の号を増増されています。法然が釈迦の再来と仰がれていたためですが、徳川将軍を始め、徳川一門が信仰した浄土宗の開祖である法然上人に、相次いで大師号を贈ることによって將軍家の機嫌をとろうとした朝廷の意図が考えられます。明治四年（1871年）の法然上人の七百年忌に明治天皇が『明照大師』の号を贈られたのは純粹に宗教的なものです。

上人が去った後、弟子の成阿坊じょうあぼうが残り草庵を守つて教えを広めました。永徳元年（1381年）正慧坊智空しょうえぼうちくうが、念仏三昧堂を建立。貞享元年（1684年）慧光坊えこうぼう西念さいねんが光明庵を開創し、明治八年（補遺：尾崎住職による）浄土真宗となり、寺号を称しました。

至導しどう大和尚は榎井あるいは白方出身とも言われる禪僧の学僧で、砂中に入り経文を唱えながら即身成仏しました。文化八年（1811年）三月五日、十数日にわたり土中から念仏の声がかすかに聞こえたといっています。



正宗寺絵図

財田村の伊舎那院から光明庵に招かれた宥授和尚は、至導法印の石像を造りお堂に安置しましたが、このお堂は数年後に焼失しました。石仏の背面には「高祖大師即身成仏、依真影如此造者也」と書かれています。

明治初年に建てられた、勤王家村岡宗四郎と母^{ことこ}箏子の墓があります。村岡箏子は幕末に活躍した女性勤王家としてよく知られています。箏子は息子宗四郎とともに勤王の志士を自宅に潜伏させ、保護するなど勤王に尽くしました。丸亀に逃げてきた高杉晋作をかくまったこともあります。

宗四郎は慶応三年（1867年）二十二歳で、母箏子は明治三年（1870年）五十六歳で亡くなりました。



正宗寺本堂

權堀井戸・法然堂前手洗

法然上人は専修念仏（ひたすら念仏のみ唱えること）を禁止され、土佐に流罪となりましたが、九条兼実の配慮で、九条（関白）家の莊園の多い讃岐に流されることになり、承元元年三月二十六日、塩飽の地頭駿河權守高階保遠の館（丸亀市本島）に着き、心からの接待を受けて、後の笠島の専称寺や泊の来迎寺で数日を過ごしました。

その後、本島の小坂（後の阿弥陀寺）から十二人の弟子たちに守られて、小船で丸亀の塩屋浜（前塩屋）に上陸されました。現在の正宗寺の境内には法然上人の遺跡がたくさんあります。

（１） 權堀井戸

『權堀井戸』は正宗寺墓地の南端、西汐入川の北岸にあります。大正の初めまでは、このあたりまで小船が溯っていたので、近くにあった『船つなぎ岩』がこの井戸の傍らに移されています。

權堀井戸略縁起（權堀井戸）

そもそも
抑々當正宗寺は、今を去る七百五十有餘年の昔、念佛の元祖源空（法然上人）が配所にして、建永二年（1207年）四月一日、此の地に着船の砌り、一口の清水を乞われしも、海濱の事とて思うに任せず、此處に於いて上人乗り来らせ給ひける小

(2) 法然堂

船の櫂を以て、念仏諸共渚を穿ち給ふに、靈なる哉、深さ一尺に到せずして、こん
こんと清水湧き出て渴きを潤し給ひき。見聞の参集、上人の高徳に帰依す。櫂堀の
井戸は境内の南端にあり。今に至るも満潮の時は、井戸を蔽ひ隠すこと四、五尺な
るも、潮退けば不思議なる哉、忽ちにして清水となる。上人御在世の當時に異るこ
となし。尚、潮堀改修の為如斯^{かくのごとく}埋立せしも、原形は底に見ゆる井側なり。是れに
より、聖人自詠の歌「南無は船 阿弥陀の櫂で掘る清水末の世までも佛々と湧く」
の一首とともに、當地を字名にして櫂堀と呼ぶ。

『法然堂』は正宗寺の本堂の前にあります。法然堂の前には『洗
心手洗石』が、左側後ろには『法然上人七百五十回忌の記念碑』
が建っています。

法然堂前の洗心手洗鉢（櫂堀寺）

長宗我部元親 破壊巨刹諸城 将焼御當伽藍 恐大師遺徳而
忽起信仰之年 雨霧山石運此 以刻作此洗心 奉進元祖大師



洗心手洗石

(3) 鳥居忠耀



正宗寺 法然堂



正宗寺 櫛堀井戸

江戸南町奉行であった忠耀は、在職中の不法な取調べや収賄などの罪に問われ、丸亀京極藩にお預けの身となり、今の丸亀高等学校の正門あたりの屋敷に二十二年ほど幽閉されていましたが、慶応三年（1867年）許され、福寿院（現在の山北八幡の別当寺）や光明庵（現在の正宗寺）で一年ほど過ごして江戸に帰りました。

忠耀は医薬の心得があったので、野外に出て薬草を採取したり患者の治療に当たったりしていたそうです。

《鳥居忠耀》燿蔵 甲斐守

だいがくのかみ

はやしいら

幕府の大学頭を務めた林衡の三男として生れ、旗本鳥居家の養嗣子になり、徳川家斉

の側近として仕えました。天保十二年（1841年）南町奉行になり、天保の改革における市中の取り締まりを始めます。取締りは厳しく権謀術数を用い、蝮まむしとも妖怪（燿・甲斐ようかい）とも呼ばれました。北町奉行の遠山景元（金四郎）との対立は小説や映画・テレビで有名になりました。

【参考文献】

『新編丸亀市史』 平成七年二月発行 丸亀市史編さん委員会

『丸亀市寺院名鑑』 1997年発行 丸亀市仏教会

『満濃町史』 昭和五十年四月一日 満濃町史編集委員会編・満濃町役場発行

『日本名所風俗図会⁴ 1 四国の巻』

昭和五十六年十二月三十日発行 株式会社角川書店

『丸亀市猪熊弦一郎現代美術館リーフレット』